ひろしま自然保育推進事業 活動報告書

1．広島大学附属幼稚園

2．令和4年度の活動概要

（1） 環境構成について

本園は，東広島市のほぼ中央に位置し園舎の裏には豊かな森がある。毎年子ども達の思いを汲み取りながら、職員が環境を一緒に作っていく。子どもたちは園舎前の園庭や裏山の森に拠点をかまえ、時には自分一人で夢中になって遊んだり，時には友だちとかかわりながら試行錯誤して遊んだりと，日々自然を体中に感じながら生活をしている。しかしながら、自然相手の遊びは思わぬ発見があったり自分の思うようにいかないことがあったりと，常に様々な心情が湧いてくる。今年度も，この自然いっぱいの森の中で遊ぶ子どもたちの心の動きを大人が素直に捉え、子どもの心の動きに沿った援助を考えていった。あるがままの自然を利用したり、少し手を加えて子どもたちが気づくような環境構成をしたり、保育者自らも成長し続け環境構成の一部として存在していった。

（2） 遊びの事例

① 「カエルの気持ちとボクの気持ち」3 歳児 7 月

A 男は B 男と一緒に，ビオトープで捕まえたカエルを飼育ケースに入れて持ち歩いている。そこで保育者と周りにいた同じクラスの友達数名に遭遇する。A 男は「見て，こんだけ～ちっさいカエル」と言って飼育ケースを持ち上げて嬉しそうに保育者に見せる。保育者は「おっ，今日は4匹もおったんだね，なんて名前のカエルだろう？」と伝える。すると A 男は「トノサマガエルよ！」と得意そうに言う。周りの友達も「見せて～」と集まる。A 男は，「いいよ，ちょっと待って」と言って年中組の子どもがカエルを捕まえて放していた小さなプールに B 男と一緒に捕まえたカエルを放す。するとカエルが泳ぎはじめる。それぞれがカエルを眺めている間，数秒の沈黙がある。そして，B 男が「すーって行くんじゃね」と口を開く。C 女が「泳いでる～」と言って両手足をスイスイと動かし，カエルの真似をする。D 男は「おもしろい」と言って笑い，その場にいる数名でカエルの泳ぎの真似が始まる。保育者は，子ども達は園内の薄暗いビオトープや飼育ケースの中にいるカエルは見ているが，明るく広い水辺で泳ぐカエルの姿は馴染みがないと思い，「カエルってこうやって泳ぐんだ～」とつぶやく。すると E 男が「カエルさんすごいね，こうこうこう，足をびよ～んって…」と興奮気味に話す。

しばらくみんなで眺めていると，カエルが角の台に上がる。その姿を見て A 男は「あっ，登るところがいるわ，石，草，草」と言って，周りに生えている草をちぎってプールに入れる。他の子どもも

同じように草を入れる。カエルは，草の下を通る。A 男は「もっと入れんと登れん」と言い，みんなで草をどんどん入れていく。そうしているうちにカエルは 1 匹，2 匹とプールから飛び出す。飛び出したカエルを「逃げた！」と追いかける子どもがいるなか，A 男は「自分で帰るんよ，あっち」と言ってビオトープを指さす。保育者は「へぇ，自分で帰るんだぁ」と A 男に言う。

＊5 歳児の保育者の，カエルをプールに放すことを規制していないことで子どもが気付きを得られたという発言に対して，実は A 男がプールにカエルを放したとき，私は違和感もあった。自然豊かな環境でわざわざプールに入れる必要があるのかという感覚を私は持っていたのだと思う。しかし，5 歳児の保育者の発言にあるように泳ぎを見せたい，カエルが喜ぶかも知れないと思う子どもの心情に添うと，気づきや発見が深まるという視点で援助を考えていくことも必要であると感じた。
また，私は子どもたちの反応に対して共感するなどの言葉での援助は行っているが，意図的に環境を用意するなどの援助はしていない。プールは水遊び用として在ったもので，子どもたちが楽しさを共有できたのは，A 男がそこに気付き，自らカエルを放したからである。これまでの実践事例からも私の援助は受け身的な傾向であるのを感じている。もう少し，積極的に援助していくことで子どもたちの気付きや考えが深化するのかもしれない。

② 「乗れた！乗れたよ！」5 歳児 4 月

保育者が「おっ，E 女ちゃんや F 女ちゃんってターザンロープに乗れんの？」と尋ねる。E 女は，「うん！乗れるよ！今からやるけぇ，やって見せてあげようか」と誇らしげに答える。一方 F 女は，「F 女はやってみたいけど，怖くて乗れんのよ」と答える。二人が答えたように E 女はターザンロープに勢いよく飛び乗ってみせたが，F 女はロープを握ったまま中々飛び乗ることができない。F 女は「やっぱり怖い・・・」と話し，E 女に交代する（Ⅳ・Ⅴ）。保育者は「いや～ 確かに怖いと思うわ。先生も初めて乗ろうとした時は怖かったわ～」と話す。F 女が再度ターザンロープを握り，E 女から「飛んで乗るんよ」などとアドバイスを受けているが，やはり怖いのか握ったまま時間は過ぎ，飛び乗るのをあきらめる。しばらくの間，F 女はロープを握っては止め握っては止めを繰り返す（Ⅰ・Ⅳ・Ⅴ）。保育者は E 女や F 女とどうすれば乗れるようになるか考えるが，次第に F 女の表情が曇ってきた。

保育者が小型の台を運んでくる。E 女や F 女，途中からやってきた G 男が小型の台を見て「それ何なん？」と尋ねる。保育者が「高い台から飛び乗るのが難しい人もいるから，少し低い台を設置するんよ。そこから乗るんだったら怖くなくなるかなと思ってね」と話す。E 女と F 女が「ほぉ～」と言いながら納得しているようだ。保育者

が小型の台を設置し，杭で固定する。F 女同様，高い台からは飛び乗れなかった G 男が進んで低い方の台の上に立つ。すると G 男が，「これなら乗れそう」と話し，思い切って飛び乗る。しばらくターザンロープで前後に揺れた後，G 男が「初めて乗れた！」と嬉しそうに話す。保育者も「やったなぁ！」と喜ぶ。次に F 女の番がくる。ロープを握ってしばらくしたら，思い切って飛び乗る。F 女も少しの間，ターザンロープに揺られて降りてくると「先生，乗れたよ！」と嬉しそうだ。その後，G 男も F 女も何度も飛び乗って遊んでいる。G 男が「こっちでやってみる」と高い台に上がり，思い切ってターザンロープに飛び乗る。前後に揺られて降りてくると，「高いのでも出来た！」と更に嬉しそうにしている。次の番である F 女も高い台に上がり始める。低い台だとすぐに飛び乗れるようになっていたが，高い台だと流石にすぐには飛び乗れずにいる。みんなが見守る中，しばらくして F 女がターザンロープに思い切って飛び乗る。F 女が「乗れた！！」と声を上げている。降りてきてからも興奮気味に「乗れた！乗れたよ！」と低い台で乗れた時以上に嬉しそうだ（Ⅳ・Ⅴ）。保育者も「すげぇ！すごいよ！！」と言いながら共に喜ぶ。その後も G 男と F 女は繰り返し，高い台からターザンロープに飛び乗って遊んでいる。

＊保育は“できるようになった”という「結果」よりも，例えできなくとも「過程」が“大事”だということをよく聞くが，私は両方“大事”だと思っている。結果だけを追い求めると，「過程」は蔑ろにされ，「過程」だけだと「結果」は付いてこないこともある。「過程」を大事にしながらも，時間をかけてゆっくりと「結果」が付いてくれば良いのだと思う。そのような流れがあって，子どもに自信が芽生えてくるのだと思う。保育者が結果を気にして焦らないこと，“怖い”“できん”と思う子どもの気持ちを汲み，どのようにすればそれを和らげることができるのかを考えていくことが大事なのだろう。これらのことを保育者が意識すれば，事例のような援助に自ずとつながっていくように思う。

3歳、4歳、5歳の事例もたくさん本園の研究紀要第 44巻（令和4年度）に掲載している。ご覧になりたい方は本園まで連絡をいただきたい。

（3）　その他、自然体験活動の実施にあたって工夫したこと

子どもの心の動きに視点を当てて子どもの育ちを探り，保育者の援助を考えていった。カンファレンスで、次のような場面を捉えていった。

【「子どもの心が動いている」と保育者が捉えた5つの場面】

（Ⅰ）子どもの「～したい」という欲求や願いが見え，それらに向かって行動しようとしている，または行動していると捉えた場面

（Ⅱ）子どもが事象・環境などの面白さや不思議さなどに触れ，興味・関心が広がっていると捉えた場面

（Ⅲ）子どもが他者と過ごしたり，かかわったりすることに心地よさを感じていると捉えた場面

（Ⅳ）子ども自身の気持ちが揺れ動いていると捉えた場面

（Ⅴ）子どもが自分の気持ちを味わっていると捉えた場面

視点を設けてカンファレンスを行い、職員が話しやすい雰囲気を作り、それぞれが自分だったらという思いを語っていった。そうしながら、保育の見方や支援の方法の幅を広げていくことにつながっている。